

令和5年5月

◆久松久子 選 ～思ひ出の一句～

「虎刈りの子」

戦時下の男の子は誰もが丸刈りだったが、家で父親にバリカンで刈ってもらっていた。門井君のお父さんは不器用なのか、いつも不揃いで段を成していた。おまけに二センチ位の禿があったので、友達から「禿」とか「虎刈り」と揶揄されていた。けれど、門井君はどんなに言われても気にせず、いつもにこにこ笑っていた。父親思いの子で、お父さんに頭を刈られている時が幸せだったのだろうな。畦焼きの跡をみると門井君を想いだす。

畦焼くや虎刈りの子は今何処 久子

「初恋だったかも」

小学校の二年生か三年生の頃、近くに住む二つ年上の一郎君は、いつも子分を引き連れ、川や野原を我が物顔に遊びまわっている餓鬼大将だった。泣かされた子の親は、一郎さんをよく思っていないようだったが、私は子分として遊んでもらっていて、優しいお兄ちゃんでも少しも怖くなかった。一郎さんの家は饅頭屋なので、時々栗饅頭を失敬してきては子分達に食べさせてくれたものだ。

餓鬼大将組と橋を分けての喧嘩になる時は、一郎さんを先頭にすると、一郎さんを見ただけで相手は尻尾を巻いて一目散に逃げ帰る。そういう時の一郎さんはとても頼もしかったから、付いてまわっていたのである。

数年後、「一郎一家」から抜けて、女友達とばかり遊ぶようになり、一家のことも一郎さんのこともすっかり忘れていた。

ある日、一郎さんが名門の中学校に合格したとの噂を聞いた。学校の成績がよく級長をしていたので当然のことではあった。しばらくして、私の家の近くで、真新しい中学校の詰襟の制服に白い大きな鞆を袈裟懸けした一郎さんを見かけた。「あっ、

一郎さん！」と声をかけたが、こちらをチラとみただけで行ってしまった。忘れてしまったのだろうか…。以前のような一郎さんではなく、寂しく恥ずかしいような気分だった。あの時の真っ白な鞆は、今でも鮮明にまなうらに残っている。

その後、一学期も終わらない内に「饅頭屋の餓鬼大将が他所の家の梅の木に登り青梅を食べて死んだらしい。餓鬼大将らしい死に方だ」と大人が話しているのを聞いた。心ない言葉に腹が立って、悲しみが増した。一郎さんの家の前を通ると、田舎には似合わない美しいお母さんが饅頭を並べていた。お悔みを言えなかった小学生の私だった。

あれから何十年経っただろうか。一人で地元の天神様に参った折、梅の木があり、青い大きな実が昨夜の残り雨に濡れていた。一郎さんの大きな瞳から零れる涙のように見えた。

青梅の雫に想い馳せてをり 久子

「オペラ歌手の生の声」

昭和二十年、私が小学六年生の時、東京から有名な歌手がピアノを見せて貰いたいと我家へ来られたことがあった。父も復員しておらず、母は大慌てだった。富田義助と名乗られ、かの有名な藤原義江歌劇団に所属するオペラ歌手とのことだった。日大の音楽部の講師もしておられ、「東京の空襲でピアノが焼けてしまったので譲って欲しい」ということだった。我が家のピアノは、戦前のドイツから買ったもので、鍵盤も象牙で国産のものより響きが良かった。

ところが、富田先生は、私達三姉妹を見て、「お嬢さんが三人もいらっしゃるなら、是非、ピアノを続けてください。音楽学校へいらしてください。その時はお力になりますから」と言ってピアノを譲る話は反故にされた。

そして、私達もよく知っているポピュラーな「からたちの花」「ペチカ」「この道は」をピアノを弾きながら歌ってくださった。初めて聴く一流のテノール歌手の響きに圧倒され、舞台を観ているかに暫し呆然となった。

帰りに帝国劇場のカルメンの切符を二枚置いて行かれ、後日、母と姉が帝劇の藤

原義江歌劇団のカルメンを拝観させていただいた。舞台を観て帰って来るや否や、二人とも興奮醒め遣らずといった様子だった。ドンホセ役は藤原義江で、富田先生はモラレスの役だったと大騒ぎだった。

あの帝劇でマイクなしで響く歌声を、我が家の座敷で聴いた。あの日のことは、今でも忘れられない夢のような思い出である。

その後、私達姉妹は三人とも、バイエルまで先生についたが、それから先を教えてくれる先生は田舎にはおらず、それぞれが好き勝手な曲を弾いては遊んでいた。今思えば、ピアノは富田先生に使っていただいた方が有意義だったのと思う。

テノールの声蘇える晩夏かな 久子

◆久松久子 選 ～思ひ出の一句～

「虎刈りの子」

戦時下の男の子は誰もが丸刈りだったが、家で父親にバリカンで刈ってもらっていた。門井君のお父さんは不器用なのか、いつも不揃いで段を成していた。おまけに二センチ位の禿があったので、友達から「禿」とか「虎刈り」と揶揄されていた。けれど、門井君はどんなに言われても気にせず、いつもにこにこ笑っていた。父親思いの子で、お父さんに頭を刈られている時が幸せだったのだろうな。畦焼きの跡をみると門井君を想いだす。

畦焼くや虎刈りの子は今何処 久子

「初恋だったかも」

小学校の二年生か三年生の頃、近くに住む二つ年上の一郎君は、いつも子分を引き連れ、川や野原を我が物顔に遊びまわっている餓鬼大将だった。泣かされた子の親は、一郎さんをよく思っていないようだったが、私は子分として遊んでもらっていて、優しいお兄ちゃんでも少しも怖くなかった。一郎さんの家は饅頭屋なので、時々栗饅頭を失敬してきては子分達に食べさせてくれたものだ。

餓鬼大将組と橋を分けての喧嘩になる時は、一郎さんを先頭にすると、一郎さんを見ただけで相手は尻尾を巻いて一目散に逃げ帰る。そういう時の一郎さんはとても

頼もしかったから、付いてまわっていたのである。

数年後、「一郎一家」から抜けて、女友達とばかり遊ぶようになり、一家のことも一郎さんのこともすっかり忘れていた。

ある日、一郎さんが名門の中学校に合格したとの噂を聞いた。学校の成績がよく級長をしていたので当然のことではあった。しばらくして、私の家の近くで、真新しい中学校の詰襟の制服に白い大きな鞆を袈裟懸けした一郎さんを見かけた。「あっ、一郎さん！」と声をかけたが、こちらをチラとみただけで行ってしまった。忘れてしまったのだろうか…。以前のような一郎さんではなく、寂しく恥ずかしいような気分だった。あの時の真っ白な鞆は、今でも鮮明にまなうらに残っている。

その後、一学期も終わらない内に「饅頭屋の餓鬼大将が他所の家の梅の木に登り青梅を食べて死んだらしい。餓鬼大将らしい死に方だ」と大人が話しているのを聞いた。心ない言葉に腹が立って、悲しみが増した。一郎さんの家の前を通ると、田舎には似合わない美しいお母さんが饅頭を並べていた。お悔みを言えなかった小学生の私だった。

あれから何十年経っただろうか。一人で地元の天神様に参った折、梅の木があり、青い大きな実が昨夜の残り雨に濡れていた。一郎さんの大きな瞳から零れる涙のように見えた。

青梅の雫に想い馳せてをり 久子

「オペラ歌手の生の声」

昭和二十年、私が小学六年生の時、東京から有名な歌手がピアノを見せて貰いたいと我家へ来られたことがあった。父も復員しておらず、母は大慌てだった。富田義助と名乗られ、かの有名な藤原義江歌劇団に所属するオペラ歌手とのことだった。日大の音楽部の講師もしておられ、「東京の空襲でピアノが焼けてしまったので譲って欲しい」ということだった。我が家のピアノは、戦前のドイツから買ったもので、鍵盤も象牙で国産のものより響きが良かった。

ところが、富田先生は、私達三姉妹を見て、「お嬢さんが三人もいらっしゃるなら、

是非、ピアノを続けてください。音楽学校へいらしてください。その時はお力になりますから」と言ってピアノを譲る話は反故にされた。

そして、私達もよく知っているポピュラーな「からたちの花」「ペチカ」「この道は」をピアノを弾きながら歌ってくださった。初めて聴く一流のテノール歌手の響きに圧

◆久松久子 選 ～思ひ出の一句～

「虎刈りの子」

戦時下の男の子は誰もが丸刈りだったが、家で父親にバリカンで刈ってもらっていた。門井君のお父さんは不器用なのか、いつも不揃いで段を成していた。おまけに二センチ位の禿があったので、友達から「禿」とか「虎刈り」と揶揄されていた。けれど、門井君はどんなに言われても気にせず、いつもにこにこ笑っていた。父親思いの子で、お父さんに頭を刈られている時が幸せだったのだろうな。畦焼きの跡をみると門井君を思い出す。

畦焼くや虎刈りの子は今何処 久子

「初恋だったかも」

小学校の二年生か三年生の頃、近くに住む二つ年上の一郎君は、いつも子分を引き連れ、川や野原を我が物顔に遊びまわっている餓鬼大将だった。泣かされた子の親は、一郎さんをよく思っていないようだったが、私は子分として遊んでもらっていて、優しいお兄ちゃんでも少しも怖くなかった。一郎さんの家は饅頭屋なので、時々栗饅頭を失敬してきては子分達に食べさせてくれたものだ。

餓鬼大将組と橋を分けての喧嘩になる時は、一郎さんを先頭にすると、一郎さんを見ただけで相手は尻尾を巻いて一目散に逃げ帰る。そういう時の一郎さんはとても頼もしかったから、付いてまわっていたのである。

数年後、「一郎一家」から抜けて、女友達とばかり遊ぶようになり、一家のことも一郎さんのこともすっかり忘れていた。

ある日、一郎さんが名門の中学校に合格したとの噂を聞いた。学校の成績がよく級

長をしていたので当然のことではあった。しばらくして、私の家の近くで、真新しい中学校の詰襟の制服に白い大きな鞆を袈裟懸けした一郎さんを見かけた。「あっ、一郎さん！」と声をかけたが、こちらをチラとみただけで行ってしまった。忘れてしまったのだろうか…。以前のような一郎さんではなく、寂しく恥ずかしいような気分だった。あの時の真っ白な鞆は、今でも鮮明にまなうらに残っている。

その後、一学期も終わらない内に「饅頭屋の餓鬼大将が他所の家の梅の木に登り青梅を食べて死んだらしい。餓鬼大将らしい死に方だ」と大人が話しているのを聞いた。心ない言葉に腹が立って、悲しみが増した。一郎さんの家の前を通ると、田舎には似合わない美しいお母さんが饅頭を並べていた。お悔みを言えなかった小学生の私だった。

あれから何十年経っただろうか。一人で地元の天神様に参った折、梅の木があり、青い大きな実が昨夜の残り雨に濡れていた。一郎さんの大きな瞳から零れる涙のように見えた。

青梅の雫に想い馳せてをり 久子

「オペラ歌手の生の声」

昭和二十年、私が小学六年生の時、東京から有名な歌手がピアノを見せて貰いたいと我家へ来られたことがあった。父も復員しておらず、母は大慌てだった。富田義助と名乗られ、かの有名な藤原義江歌劇団に所属するオペラ歌手とのことだった。日大の音楽部の講師もしておられ、「東京の空襲でピアノが焼けてしまったので譲って欲しい」ということだった。我が家のピアノは、戦前のドイツから買ったもので、鍵盤も象牙で国産のものより響きが良かった。

ところが、富田先生は、私達三姉妹を見て、「お嬢さんが三人もいらっしゃるなら、是非、ピアノを続けてください。音楽学校へいらしてください。その時はお力になりますから」と言ってピアノを譲る話は反故にされた。

そして、私達もよく知っているポピュラーな「からたちの花」「ペチカ」「この道は」をピアノを弾きながら歌ってくださった。初めて聴く一流のテノール歌手の響

きに圧倒され、舞台を覗いているかに暫し呆然となった。

帰りに帝国劇場のカルメンの切符を二枚置いて行かれ、後日、母と姉が帝劇の藤原義江歌劇団のカルメンを拝観させていただいた。舞台を覗いて帰って来るや否や、二人とも興奮醒め遣らずといった様子だった。ドンホセ役は藤原義江で、富田先生はモラレスの役だったと大騒ぎだった。

あの帝劇でマイクなしで響く歌声を、我が家の座敷で聴いた。あの日のことは、今でも忘れられない夢のような思い出である。

その後、私達姉妹は三人とも、バイエルまで先生についたが、それから先を教えてくれる先生は田舎にはおらず、それぞれが好き勝手の曲を弾いては遊んでいた。今思えば、ピアノは富田先生に使っていただいた方が有意義だったのと思う。

テノールの声蘇える晩夏かな 久子